

# 栃木県宇都宮市竹下浅間山古墳の須恵器甕

## －真格子叩き須恵器甕の出現期と副葬品－

うち やま とし ゆき  
内山 敏行

はじめに	3 個別資料の特徴
1 竹下浅間山古墳の概要	4 副葬品と真格子叩き須恵器甕の出現時期
2 須恵器甕の概要	5 真格子叩き須恵器甕出現期の状況

墳長52mの前方後円墳から出土した古墳時代後期末の須恵器甕を追加報告・検討する。真格子叩き調整を行なう須恵器甕は、栃木県域南部に分布の中心を持つ下野系須恵器甕の一種である。竹下浅間山古墳は真格子叩き調整を行う須恵器甕の最初期の事例である。副葬品を検討して、馬具の宮代編年Ⅴ期後半に該当し、奈良県牧野古墳や島根県上塩冶築山古墳と並行する時期を推定した。須恵器編年では高蔵寺（TK）209号窯式期の古段階に相当する。

### はじめに

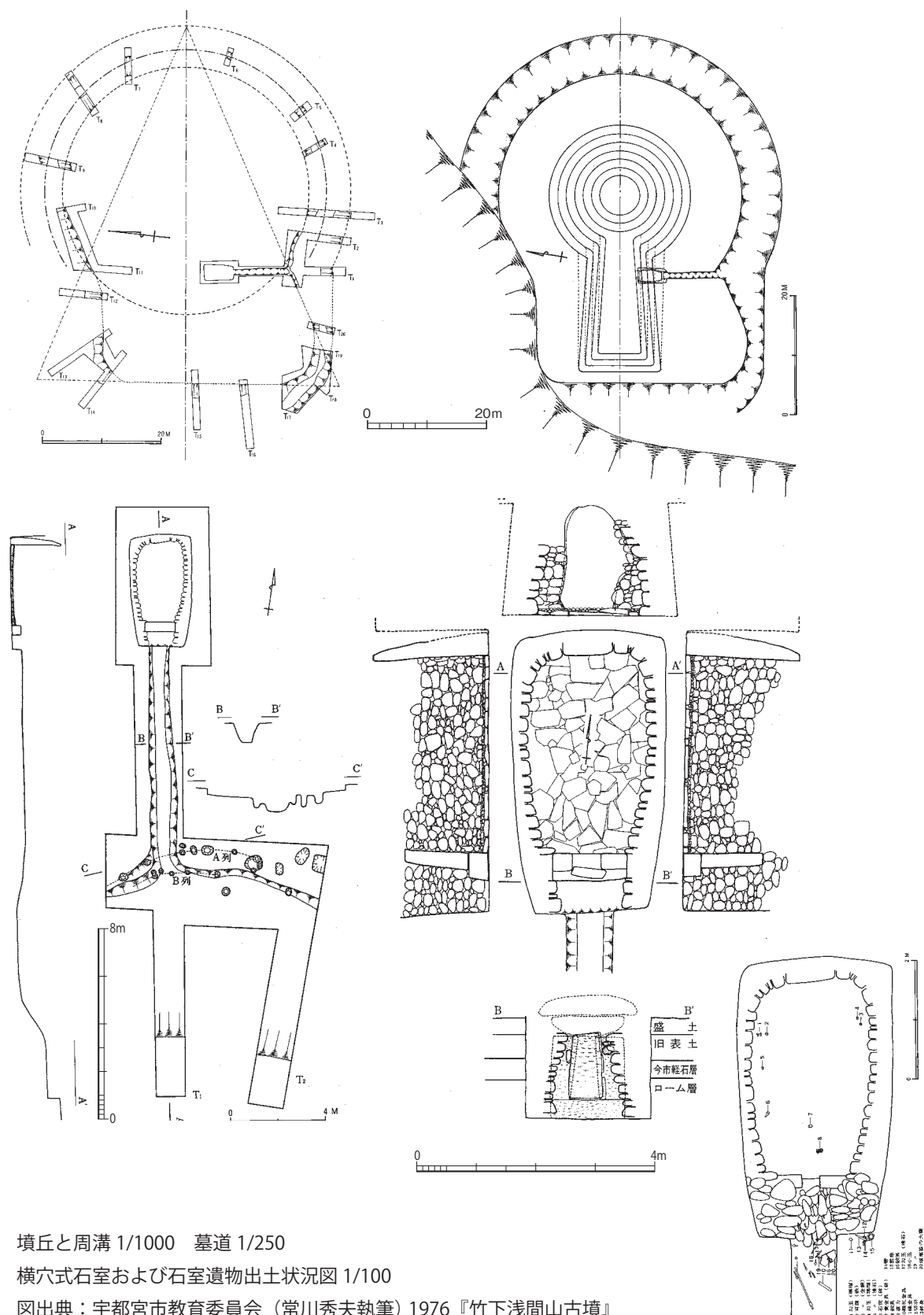
古墳時代後期末から終末期の下毛野地域つまり栃木県域南部では、外面胴部真格子叩き、頸部一本篋描き波状文、櫛描き横区画、長胴形胴部などの特徴を持つ在地産須恵器甕が認められる。この甕を佐藤渉は「下野系須恵器甕」と命名した（佐藤2019, p.87）。真格子叩きは群馬県産や福島・茨城県産の須恵器甕にも少し認められるが（藤野2019, pp.73, 76）、特に栃木県域で盛んに用いられる成形・調整法で、下野系須恵器甕を認定する基準とされている要素のひとつである。

須恵器甕における外面真格子叩き調整の出現時期を考える手がかりは、最後の前方後円墳に伴う事例である。栃木県下野市御鷲山古墳、宇都宮市竹下浅間山古墳、那珂川町梅曾大塚古墳が該当する。最後の前方後円墳が築造される時期に、真格子叩き調整を行なう下野系須恵器甕が出現したことがわかる。出現以後の事例は、前方後円墳消滅後の大形円墳である下野市下石橋愛宕塚古墳や壬生町車塚古墳・三番塚古墳で認められる。下野市御鷲山古墳→下石橋愛宕塚古墳は連続する首長墳である。古墳時代終末期つまり7世紀に最も目立ち、7世紀中葉頃の生産地として真岡市南高岡窯跡（梁木1987）が知られる。7世紀末から8世紀前葉の栃木県佐野市三毳山麓窯跡群において北山・八幡窯跡群および和田窯跡（内山1997；津野他2004, pp.146, 150；三毳窯跡研究会2009・2011）で確認されるのが、真格子叩き調整甕の下限である。

本稿では、竹下浅間山古墳の報告書（常川1976）に掲載された以外の須恵器破片を追加報告して、真格子叩き調整の須恵器甕が伴うことを明確にする。そして副葬品から古墳の時期を検討し、真格子叩き調整技法の出現時期を明確にする。約半世紀前の出土資料を活用し、現状で観察できる情報を報告する。

### 1 竹下浅間山古墳の概要

竹下浅間山古墳は、栃木県宇都宮市竹下町に所在する古墳後期末の中規模前方後円墳である。墳丘上段が削平された後に周囲のトレンチ調査が行われて（常川1976）、墳丘下段長52.5m、後円部径41m、前方部長11.5mであることが判明した。また、破壊される前の記録によると墳丘上段は長さ42m、後円部径24m・高さ3m、前方部幅8～10m・高さ1.5mである。二段築成の墳丘下段の広い平坦面（基壇）は、後円部で平坦

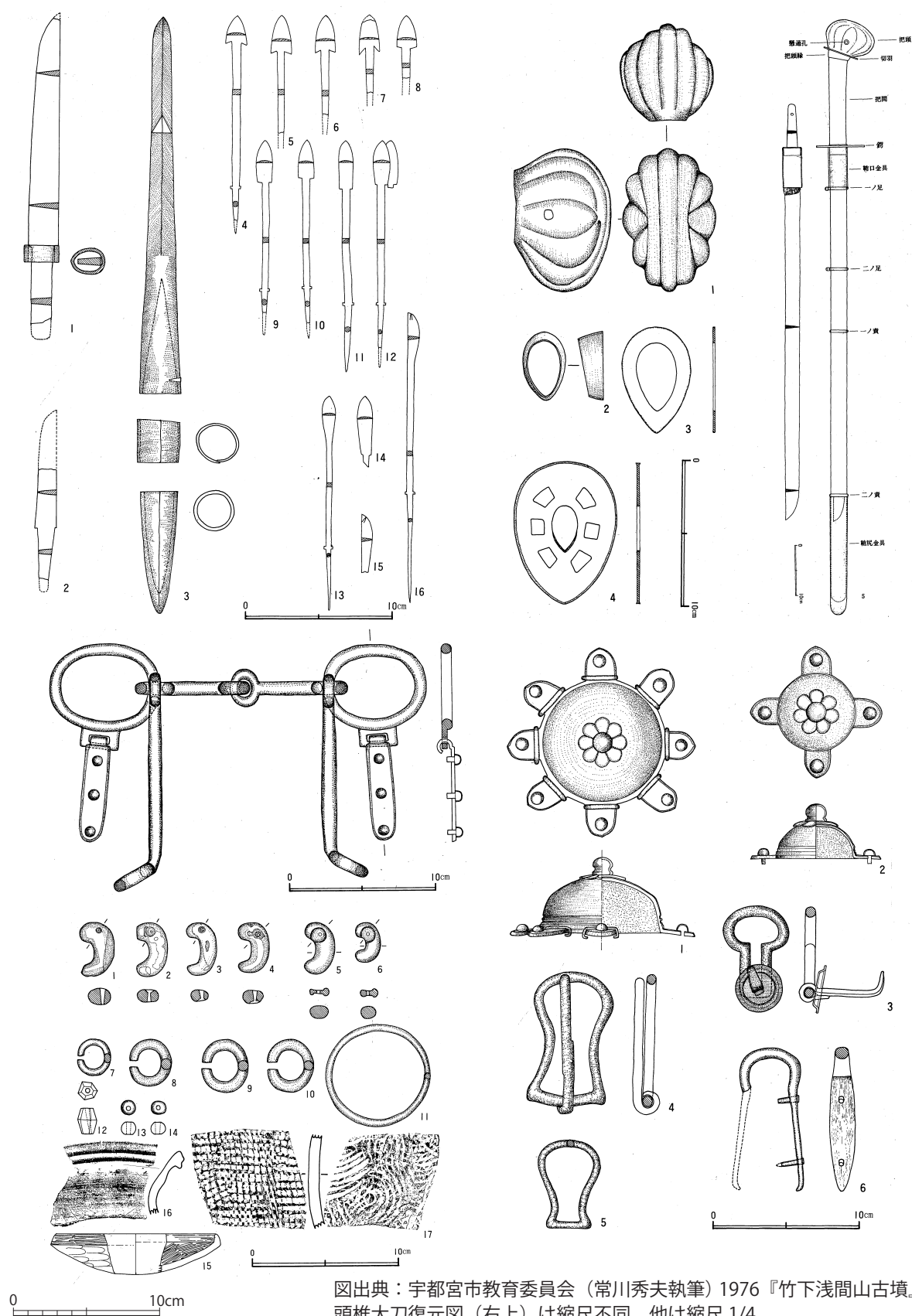


墳丘と周溝 1/1000 墓道 1/250

横穴式石室および石室遺物出土状況図 1/100

図出典：宇都宮市教育委員会（常川秀夫執筆）1976『竹下浅間山古墳』

第1図 竹下浅間山古墳の墳形と横穴式石室



面幅8.5m、前方部前縁で平坦面幅約2mと復原されている。周濠は幅6～7m、深さ1.2～1.5mである（第1図上）。

宅地造成工事にともない、前方部に所在する横穴式石室（第1図右）が調査された。川原石小口積みで奥壁と天井石は硬砂岩の割石、玄門の間仕切石・立柱石・閉塞石は凝灰岩切石である。主に石室入口の外側周辺（第1図下右）で副葬品と須恵器破片が出土した。出土遺物は豊富で、金銅装頭椎大刀1振、馬具（釣金具付の小型矩形立間造素環轡1・辻金具1・雲珠1・鍔釣金具1・しおで1・カ具2）、三角穂鉄鉾1、片刃および両刃の長頸鉄鏃19以上、刀子2、勾玉（メノウ4・滑石2）、水晶切子玉1、丸玉3（石製2・土製1）、耳環4（銅心金環2・鉄心耳環2）、銅釧1（以上第2図）、土師器杯破片、須恵器甕破片（第2図左下および第3・4図）がある。頭椎大刀は、報告書の復元図では単脚足金具が二箇所描かれているが、足金具は出土していないので、本来は佩用装置を持たない大刀であった可能性のほうが高い。燃やされて柄頭・鞘尻・鞘木が被熱および炭化している（常川1976）。埋葬儀礼で装飾大刀を破損する事例である。

この地域で、先行する古墳は明らかではない。後続する可能性のある主要な古墳として、宇都宮市板戸町所在の板戸愛宕塚古墳群（とちぎ未来づくり財団2017）のSZ-01が墳径52m、SZ-02が墳径28mで7世紀頃と推定できる。SZ-02に真格子叩き須恵器甕破片がある。他に、板戸不動山古墳群（宇都宮市2014, p.7）、同市道場宿町所在の大塚古墳（時期不詳の円墳または近世の塚）がある。

## 2 須恵器甕の概要

浅間山古墳で出土した須恵器甕破片のうち、1976年報告書では第2図16・17として口頸部1片と胴部1片の実測図と拓本が掲載されて、「須恵器甕 16と17は同一個体である。16は口縁で外面は横ナデで整形され口唇部下に凸帯がまわっている。内面は横ナデである。17は体部片で外面には格子状の叩き目、内面は青海波痕がはっきりと認められる。色は灰色である。土器の出土地点は石室近くの墓道上からである。」と説明されている（常川1976, pp.20-21、第2図左下の16・17）。

この2点以外の須恵器甕破片の、細片を除く資料をここで追加報告する（第3図1～第4図9、写真1）。1976年報告の16・17番と同一個体の破片が第3・4図中にあるかどうかはよくわからないが、拓本で比較すると第3図3と4が17に似ているように見える。現在、同じ遺物箱内に16・17は見当たらない。

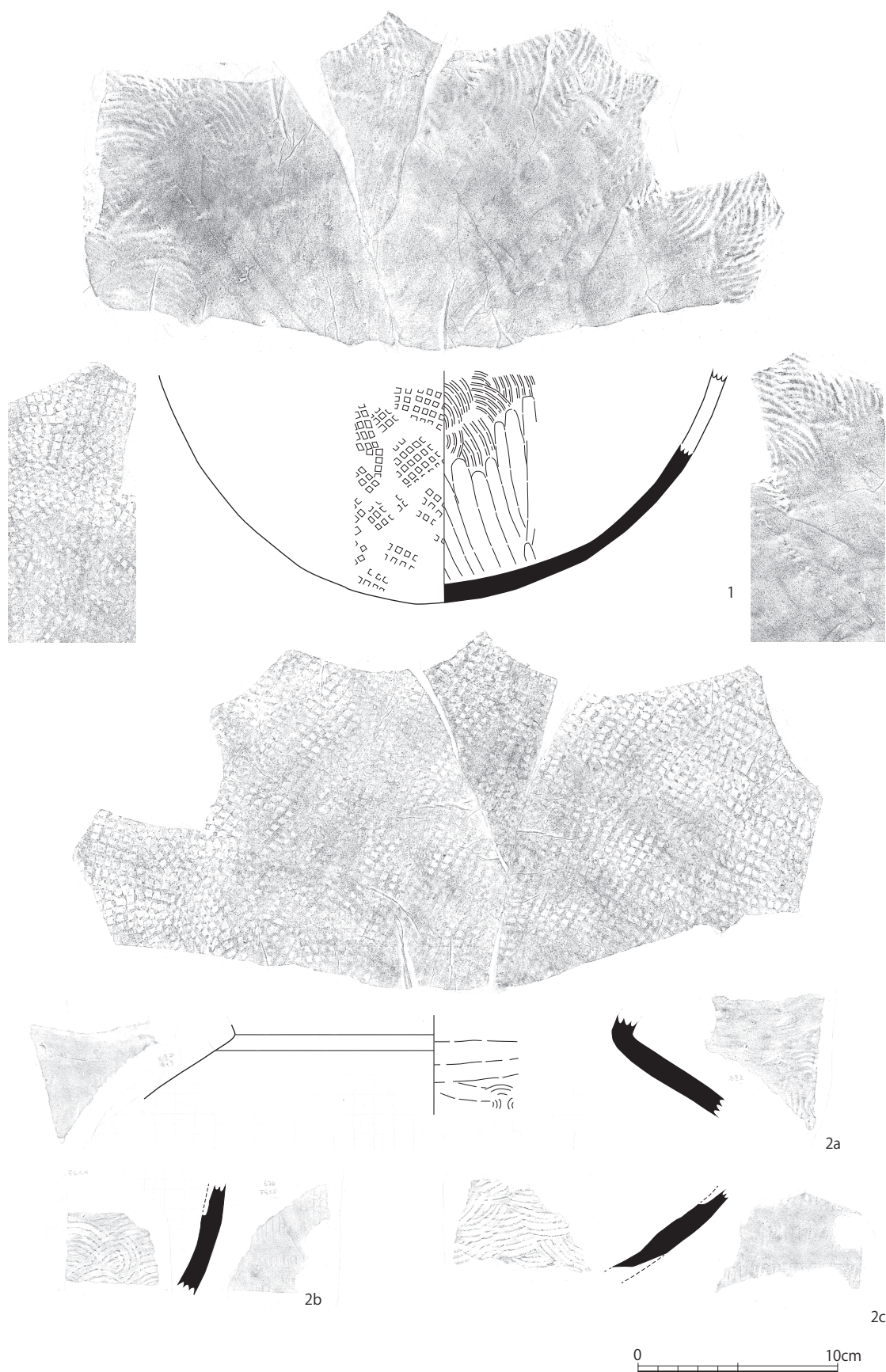
成形および外面調整の特徴として、平行叩き（2・5・6）と擬格子叩き（7）の他に、真格子叩き（1・3・4）がある。木目平行の溝を彫った叩き板を使うのが平行叩きで、木目直交の溝を彫った叩き板を使うのが擬格子叩きである。真格子叩きは、木目に平行と直交の溝を両方彫った叩き板を使う調整で、下野系須恵器甕の特徴である。叩きの後にカキメ（3下部・4・8・9）や、間隔を開けたナデ（2b・2c）を外面に加えるものもある。内面はすべて同心円文当具痕で、1の底部と2aの頸部は内面の当具痕を消している。9は内面に当具痕がなく横ナデである。

須恵器の個体数は6～7個程と考える。真格子叩きの甕が2種（1と3・4）、平行叩きの甕が2種（2と5・6）、擬格子叩きの甕が1種（7）、カキメを多く使う甕または壺瓶類が1種または2種（8と9）である。

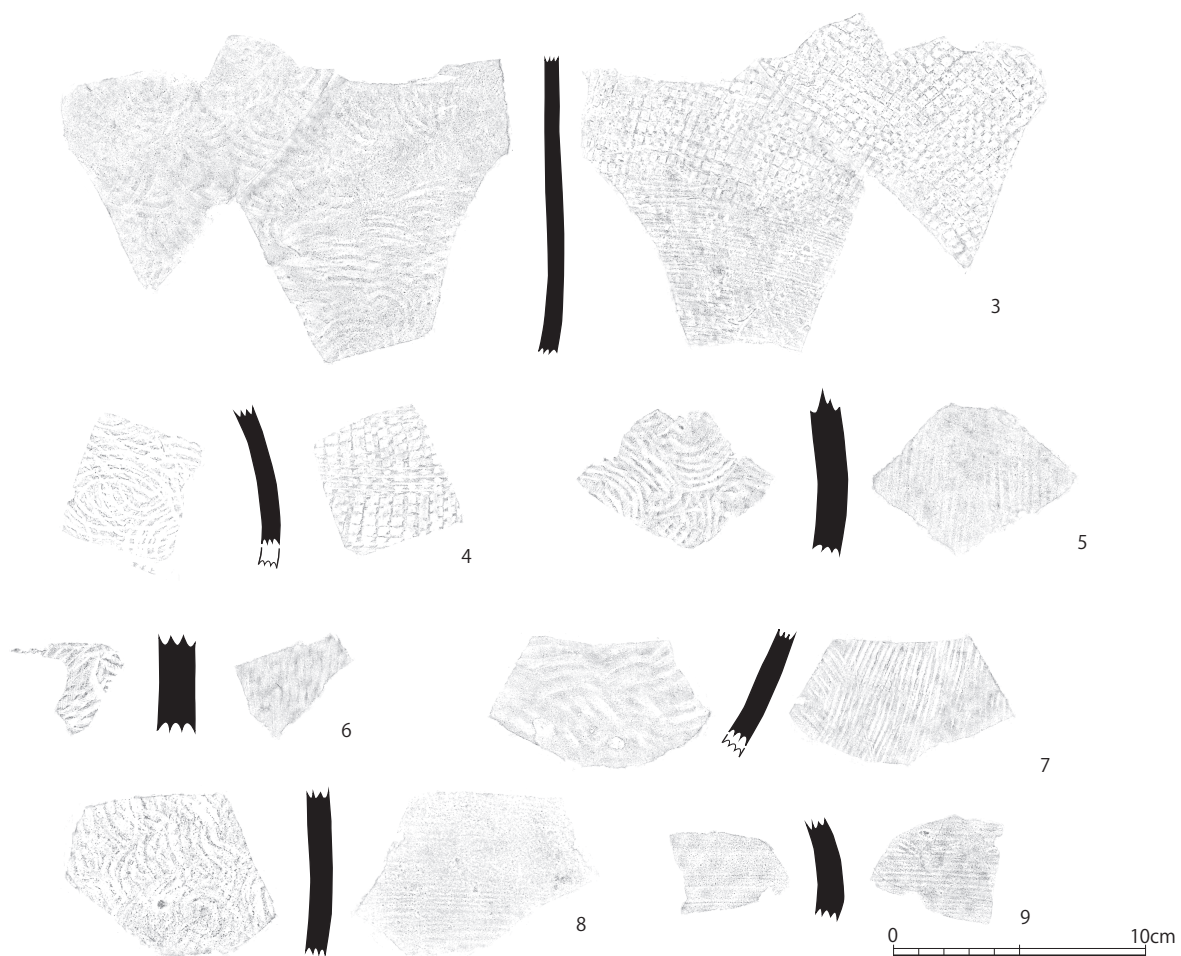
第3図2a～2cの3片は、破面が赤い特徴的な色調・焼成と叩き調整からみて同一個体と判断できる。第4図5と6も、内面の当具痕に細い平行線状の木目が浮き出て見える特徴からみて、同一個体の可能性を持つ。第4図3・4は、内外面の叩き目から推定すると、1976年報告書掲載の17と同一個体かもしれない。

出土位置を確認できる遺物は、「石室上」・「墓道上」・「閉塞上」と注記されている破片（1・2・4）が多い。また注記が「1トレ西拵」あるいは「1トレ西端」の5・7・9は墓道入口部西側、「2トレ」と注記されている6は墓道入口の南東で出土している。





第3図 竹下浅間山古墳出土須恵器甕



第4図 竹下浅間山古墳出土須恵器甕

### 3 個別資料の特徴（第3図1・2、第4図3～9）

1 胴部復元径28.5cm以上・残存高11.7cm。外面胴部の真格子叩き目は、底部に近づくとき不定方向にばらつく。内面は右から左へ進む同心円文当具痕の後に、一方向に向きがそろったナデで底中央下部の当具痕を消している。10YR6/1～10YR 7/11灰色で、胎土はやや粗く硬質で、5mm以下の白礫少量と2mm以下の白砂やや多量を含む。「閉塞上」の注記からみて、閉塞石上方の墓道埋土上層で出土した。遺物出土状況図で轡と刀の中間に20番としてこの須恵器の破片2点が描かれている（本稿第1図右下）。

2 (a・b・c) 同一個体とみられる3片で、2aは頸部復元径20.0cm・残存高4.9cm。外面は頸部と肩部にロクロナデ（2a）、胴部は浅い縦位の平行叩き目の後に1～2cmの間隔をあけた軽いロクロナデで幅狭く叩き目を消す（2b・2c）。内面の同心円文当具痕は、頸部付近ではヨコナデで大半を消し（2a）、胴下部では上方向へ進む当具痕が数多く重なる（2c）。2.5Y6/1黄灰色で、胎土はやや緻密・やや硬質で赤粒やや多量と白粒少量を含む。2a・2b・2cの注記はそれぞれ「石室上」・「墓道上」・「石室上3.23」で、石室と墓道の上方で出土した。3.23はおそらく3月23日の意味であろう。

3 胴部2破片が接合したもので、外面は真格子叩き目の後に破片下部に浅いカキメを入れる。内面の同心円文当具痕は、破片上部では浅く、破片下部では深い当具痕が下方向へ密に進む。7.5Y4/1灰色で、胎土は緻密硬質で白砂と白細砂やや少量を含む。発掘調査当時の注記がないため、出土位置は不明である。

4 外面は真格子叩き目の格子が縦方向にならび、叩きの後に4本1組の浅いカキメを入れる。内面の同



心円文当具痕は進む方向が不規則である。5YR6/1灰色で、胎土は緻密硬質で、白砂・白細砂少量と最大長径6mm以下の白礫・白粗礫少量を含む。「ボ道上」の注記からみて、墓道埋土上層で出土した。3と4は1976年報告図の17番の破片に叩き目が似ているように見える。

5・6 5と6は、同一個体の上半部と下半部破片かもしれない。外面は縦位の平行叩きで、叩き板の浅く細い木目が横位にかすかに見える。5には灰黄色気味の自然釉が降灰状に薄く付着するので叩き目がよく見えない。内面の同心円文当具痕には、平行線状の浅く細い木目(10本/1cm)が明瞭に浮き出ている。5ではおそらく当具痕が左へ進んでいる。5は外面5YR7/2灰白色、内面N7/0灰色、6は2.5GY6/1オリーブ灰色。胎土は緻密硬質で、長径3mm以下の白礫・白砂少量と白砂・細砂やや多量を含む。5は「1トレ西拡」の注記からみて1トレンチ西側拡張部分つまり墓道入口南西部で出土した。6は「2トレ」の注記からみて2トレンチつまり墓道入口南東方向の後円部南周溝で出土した。

7 外面は木目直交の溝を彫った叩き板で擬格子叩き。内面は浅い同心円文当具痕で、内面に小斑状の自然釉が見られるので底部が近いとみられる。胎土は緻密硬質で、長径4mm以下の白礫1点のほかに白砂・細砂少量を含む。「1トレ西端」の注記が1トレンチ西拡張部の意味であれば、墓道入口南西部で出土したものであろう。

8 外面は浅いカキメ、内面は同心円文当具痕。10Y5/1灰色で、胎土は緻密硬質で白砂と白細砂やや少量を含む。発掘調査当時の注記がないため、出土位置は不明である。

9 特に外面で上下方向の丸みが強い。外面はカキメ、内面はロクロナデ。2.5GY6/1オリーブ灰色で、胎土は緻密硬質で白砂と白細砂やや少量を含む。「1トレ西拡」または「1トレ西端」と読める注記からみて1トレンチ西側拡張部分つまり墓道入口南西部で出土したものであろう。

#### 4 副葬品と真格子叩き須恵器甕の出現時期

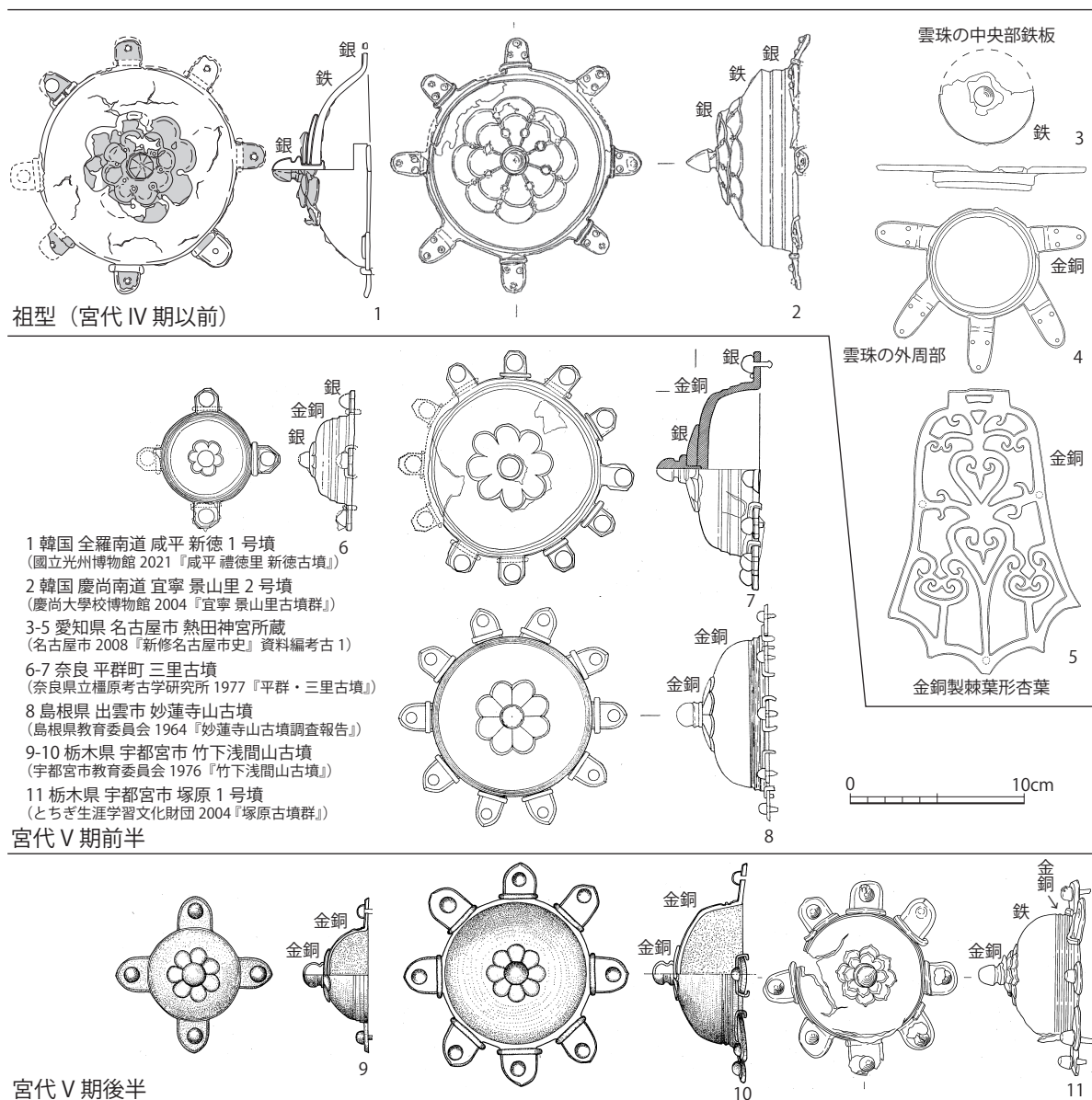
竹下浅間山古墳の副葬品から古墳の時期、および真格子叩き調整の須恵器甕の出現時期を検討する。結論を先に示すと、高蔵寺(TK)209型式期古段階に並行し、6世紀末から7世紀初頭頃になる。

浅間山古墳の副葬品で、時期を最も詳しく検討できる遺物は、鉄地金銅装雲珠および辻金具である。浅間山古墳の雲珠・辻金具は、宮代編年Ⅴ期後半に該当する(宮代1993, p.274)。頂上に花形座と宝珠飾を持つ多脚(8脚~12脚)の鉢状雲珠を中心として、変遷過程をたどる(第5図)。

〔宮代編年Ⅳ期およびそれ以前〕雲珠の脚数が8脚で、鉄製鉢部の上に銀張の花形座と宝珠飾を持つ韓国全羅南道 咸平 新徳1号墳例は百済系とみられる(諫早2021, p.116)。鉄製鉢部の下半に、銀張の2段を巡らせる慶尚南道 宜寧 景山里2号墳例(慶尚大2004)は、中央部別造・外周部有段金銅製の新羅系雲珠・辻金具の要素を鉢部に取り入れている(諫早2021, p.120)。中央部が鉄製／外周部が金銅製で2段を巡らせる新羅系舶載品として、愛知県熱田神宮所蔵品(推定熱田神宮周辺古墳出土品：瀬川2008)を図示した。百済系の鉄地銀装宝珠飾+花形座と、新羅系の外周部有段装飾を併用して製作した地は、景山里2号墳が所在する大加耶地域であろう(李炫姪2009, p.109；諫早2021, p.120)。関連資料として、金銅製で段がある外周部に、金銅+木製の中央部を組み合わせた大阪府海北塚古墳例があり(三輪1990)、これも大加耶製品と考えられる(内山2012, p.315；諫早2012, p.101；諫早2013, pp.353-355)。海北塚例は日本に搬入された舶載品馬具として宮代Ⅳ期に位置付けられる(宮代1993, p.273)。熱田神宮例に伴う棘葉形杏葉は、筆者編年案で後期2段階(内山2019, pp.67, 69)、桃崎編年(桃崎2001, pp.25-26；桃崎2023, pp.292, 294)で「熱田神宮・沖ノ島A・B・C段階」に含まれる。後期2段階の杏葉は、宮代Ⅳ期の雲珠・辻金具と連結して用いるので、熱



竹下浅間山古墳出土須恵器（上：1 側面 中：2～9 表面 下：2～9 裏面）



第 5 図 雲珠・辻金具の変化と時期

田神宮例も宮代編年IV期に位置付けできる。

〔宮代編年V期前半〕 雲珠の脚数が10脚または12脚に増えた事例が倭で現れる。金銅張鉢部の上に銀張の花形座と宝珠飾を持つ12脚の奈良県三里古墳例(奈良県1977, pp.45, 47)は、頂部飾に銀を張る点が景山里2号墳例を継承する。10脚の島根県妙蓮寺山古墳例が三里古墳例に後続し、ここで頂部飾の被せ材が金銅に変化している(島根県教育委員会1964, pp.24-25)。

〔宮代編年V期後半〕 段が凹線に変わり、雲珠の脚数が8脚に減る。鉢部の上半が鉄、下半が金銅張で凹線を巡らせる栃木県塚原1号墳例は、景山里2号墳例の上半鉄・下半銀張を継承している。上塩冶築山古墳例の鉢と責金具に銀を張る点も古い特徴である。竹下浅間山古墳例や島根県上塩冶築山古墳例(坂本他2018, p.39-40)は鉢部全面が金銅張で、上に乗る頂部の花形座には鉢部と別の金銅板を張る。型式学的には塚原1号墳と上塩冶築山が竹下浅間山よりも僅かに古い。

〔宮代編年VI期〕 雲珠の脚数は8脚で、脚の責金具、鉢部の凹線が省略されてゆく。頂部に花形座を載せ



る場合は、鉢部と同じ金銅板を一枚で張るように変化する（第6図下半）。

〔宮代編年と古墳後期編年および須恵器型式の並行関係〕 宮代V期はTK43型式期からTK209型式期前半、宮代VI期はTK209型式期後半に並行する（宮代1993, p.282）。竹下浅間山古墳が属する宮代V期後半の指標になる後期古墳として奈良県牧野古墳（奈良県立橿原考古学研究所1987）、島根県上塩冶築山古墳（坂本他2018）がある。牧野古墳の馬具2組のうち古相の組（鉾数が多い轡と杏葉、責金具を伴う雲珠と辻金具）、上塩冶築山古墳の馬具2組のうち新相の組（追葬された小石棺に伴う馬具）が、宮代V期後半に該当する。牧野古墳の須恵器はTK209型式の古段階と考えられている（白石1996, p.145）（註1）。また、上塩冶築山古墳の時期は須恵器編年出雲4期で、陶邑TK43期末からTK209期に相当し、宮代V期新相の馬具を追葬した小石棺はTK209型式期と考えられている（坂本他2018, p.173）。

竹下浅間山古墳の副葬品から判断できる時期、および真格子叩き調整の須恵器甕の出現時期は、宮代編年V期後半およびTK209型式古段階に並行し、暦年代は6世紀末から7世紀初頭頃と考えられる。三角穗式鉄鉾も同様の年代が考えられる（第1図左上、齊藤2023）。頭椎大刀（第1図右上）は、馬具よりも半世紀程度新しく考える意見がある（豊島2019）。この見解に従えば、馬具など初葬時の遺物を石室前に取り出した時の儀礼に用いた大刀か、または追葬の副葬品と考えることになる。

## 5 真格子叩き須恵器甕出現期の状況

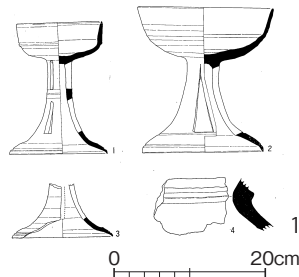
下野系須恵器甕のうち、前方後円墳において埴輪と共存している下野市御鷲山古墳出土例を下野系須恵器甕の最古事例と佐藤はみている（佐藤2019, p.91）。下野系須恵器甕には、下野の地域色が強いものと、北関東西部の影響が強いものがあり、真格子叩き調整の須恵器甕は後者に含まれる（佐藤2022, p.125）。

今回報告した竹下浅間山古墳は、真格子叩き須恵器甕の最初期の事例になる。竹下浅間山古墳の副葬品の時期は、下野市御鷲山古墳の直前段階である（第6図）。馬具は上述した雲珠・辻金具、鉄鏃は後期の広域編年（水野2003）と古墳時代終末期東日本の棘関長頸腸鉄鏃編年（内山2003）を用いた。須恵器甕自体の特徴から浅間山と御鷲山の埋葬時期差を決めることは難しいので、二古墳の埋葬時期をおおよそ同じころー最後の前方後円墳に真格子叩き甕が供給されたTK209型式期ーととらえた上で、被葬者たちが馬具や弓矢等を入手した活動時期差としては浅間山が御鷲山よりも少し古いと考えることができる。

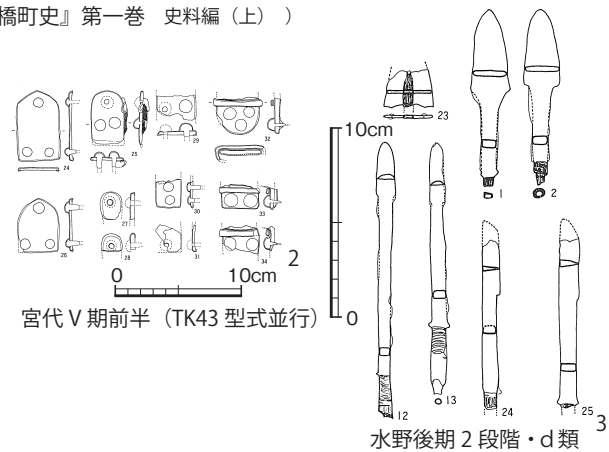
埴輪があることを理由に御鷲山古墳を古く考えることは適切でないとする。埴輪を持つ御鷲山古墳は後期後葉、埴輪を持たない竹下浅間山古墳は後期末で、御鷲山が浅間山より古いと考える意見もあろう。しかし、前方後円墳が消滅した後の終末期初頭に築かれた下石橋愛宕塚古墳や壬生町車塚古墳にも埴輪が残存することが明らかになっている（中山2020；日高2022）。第6図で竹下浅間山古墳以外の石橋横塚→御鷲山→下石橋愛宕塚古墳は、下野市石橋・薬師寺地域の首長墳系列である。終末期前葉の下石橋愛宕塚まで埴輪が継続するこの系列では、在地産の須恵器甕を多量に用いるようになった御鷲山・下石橋愛宕塚段階まで埴輪祭祀も長く残る状況を認識する必要がある（佐藤2019, p.91）。

真格子叩き須恵器甕は、在地生産が始まった初期段階で、鬼怒川東岸北部の竹下浅間山古墳まで供給されている。このことは、鬼怒川以西の下野市周辺古墳群と鬼怒川東岸の竹下浅間山古墳が、前方部石室と広い一段目を共有することや、下毛野中央部で産出する凝灰岩の玄門部石材を10km以上の距離まで陸路で供給していること（内山2021；今平2023, p.29）と関わる。下毛野南部の最有力首長層による強い影響力の範囲を読み取るうえで重要な事例である。

下野市 石橋横塚古墳（石橋町史編さん委員会 1984 『石橋町史』 第一巻 史料編（上））



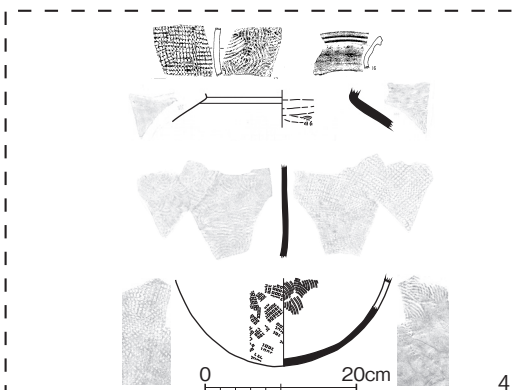
下野系須恵器甕出現以前  
群馬系須恵器（TK43 型式並行）



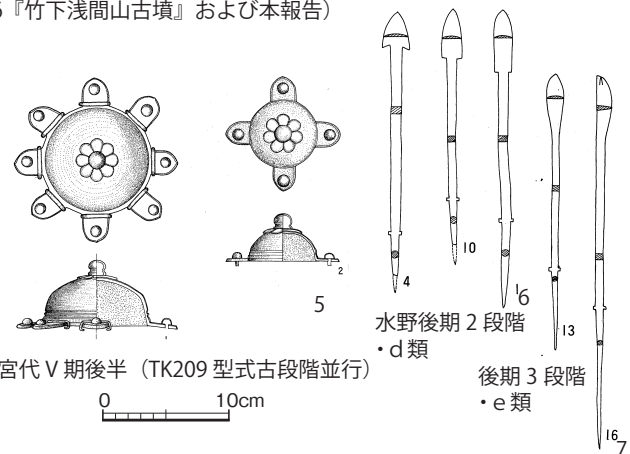
水野後期 2 段階・d 類

TK43 型式期（6 世紀後葉）

宇都宮市 竹下浅間山古墳（宇都宮市教育委員会 1976 『竹下浅間山古墳』 および本報告）



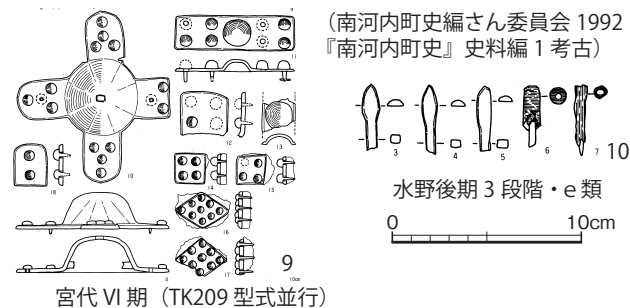
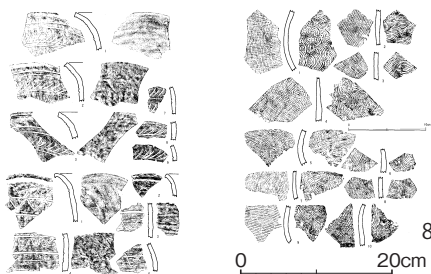
TK209 型式期古段階並行（6 世紀末から 7 世紀初）



水野後期 2 段階  
・d 類

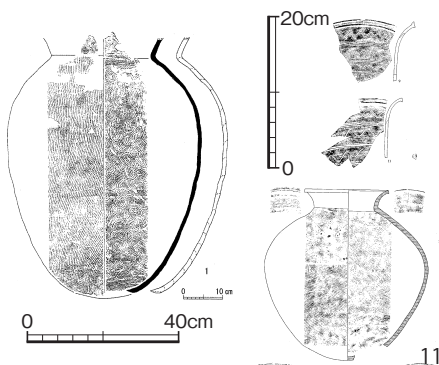
後期 3 段階  
・e 類

下野市 御鷲山古墳



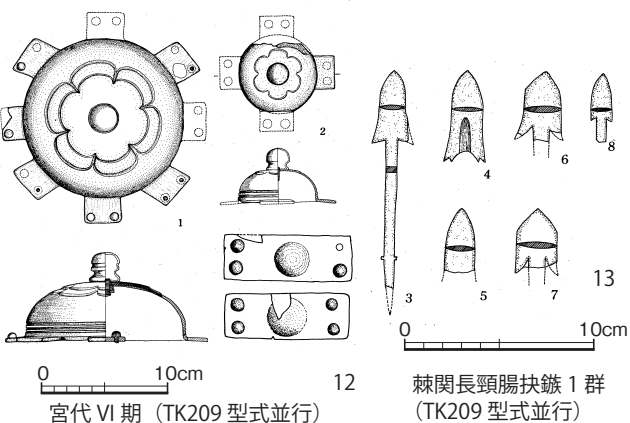
水野後期 3 段階・e 類

下野市 下石橋愛宕塚古墳  
（中山真理 2018 『栃木県立博物館研究紀要』 35）



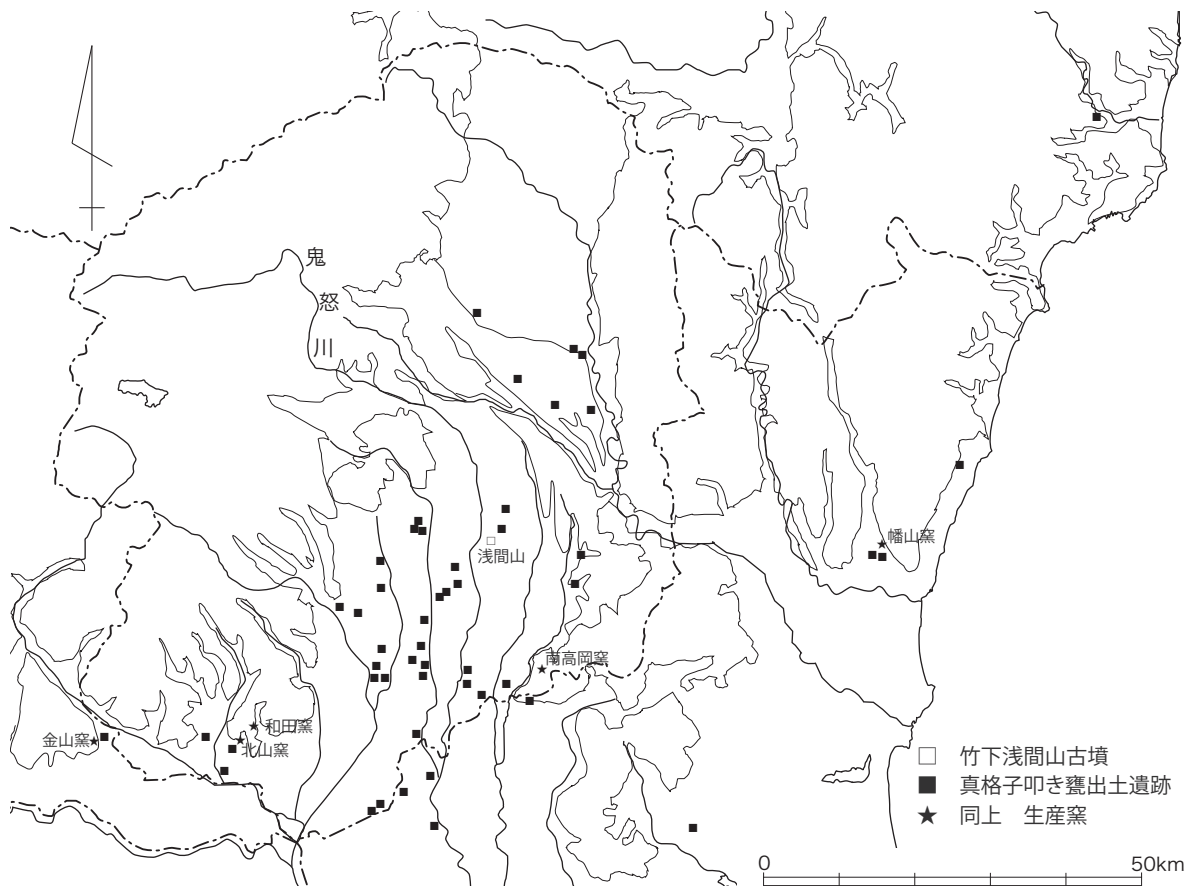
TK209 型式期新段階並行（7 世紀前葉）

（栃木県教育委員会 1974 『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』）



棘関長頸腸扶鉢 1 群  
（TK209 型式並行）

第 6 図 鉄鉢・雲珠・辻金具と真格子叩き調整下野系須恵器甕（破線内）の時期



第7図 真格子叩き須恵器甕の出土遺跡（6世紀末～8世紀前葉）

### 執筆後記と謝辞

竹下浅間山古墳は、文化財担当職員が市町村に配置される前の1970年代に、栃木県教育委員会の常川秀夫先生が宇都宮市教育委員会の発掘調査を担当し、当時の栃木県立郷土資料館で整理作業を行ったと見られる。おそらくその経緯によって、1970年代の出土遺物箱に竹下浅間山古墳の報告書不掲載資料が収納されて栃木県埋蔵文化財センターの収蔵庫に保管されていた。報告書不掲載資料には、他に縄文時代中期土器片がある。

須恵器を調査・報告するに際して、宇都宮市教育委員会と今平利幸氏から御協力をいただいた。また、宮代栄一氏と、栃木県古墳勉強会の参加者各位から御教示・御意見をいただいた。御協力をいただいた方々に御礼を申し上げます。

### 註

(1) 牧野古墳の須恵器高杯群には新古があり（土生田1988, p.48；新納2009, pp.82, 84）、このうち古い段階をTK43型式と考える意見がある（木下1989, p.80；酒井2009, pp.237-238）。白石（1996）は、牧野古墳で高杯の3方透に加えて2方透が伴う状況をTK209型式古段階の指標にする。その理由として、田辺報告（1966, p.71）でTK209号窯跡の高杯の「透しは2段でその配置は3方のものと2方のものがある」という所見を挙げる。しかし、田辺（1966, p.70）はTK43号窯跡の高杯でも透しが2方向であることを報告しているので、2方透が出現して3方透と共存する状況はTK209号窯より前のTK43号窯ですでに現れている。TK43型式とTK209型式の区別に関して以上のような問題があることを認識した上で、ここで牧野古墳をTK209型式期に入れたのは、大勢の意見に従ったにすぎない（増田1995, pp.56, 78；佐藤2003, p.17）。TK43号窯とTK209号窯の資料内容で区別が難しい部分（白石2007, p.204；新納2009, p.82）に相当するのであろう。

(2) 内山1997；藤野2019, pp.73, 76；三毳窯跡研究会2011, pp.46-51；佐藤2019, pp.84-86, 90；佐藤2022, pp.124-125で示された事例を中心として真格子叩き甕の分布を第7図に示した。まだかなりの遺漏があると思われる。

参考文献〔日本文〕 五十音順

- 諫早直人 2012「九州出土の馬具と朝鮮半島」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会 北九州大会資料集 九州前方後円墳研究会 熊本, pp.89-121
- 諫早直人 2013「馬具の舶載と模倣」岡内三眞編『技術と交流の考古学』同成社 東京, pp.348-359
- 内山敏行 1997「律令制成立期の須恵器の系譜 栃木県」『東国の須恵器－関東地方における歴史時代須恵器の系譜－』古代生産史研究会'97シンポジウム 古代生産史研究会 壬生（栃木県下都賀郡）, pp.87-101
- 内山敏行 2003「古墳時代終末期の長頸鏃－東日本における棘関長頸腸抉鏃の評価－」『武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会シンポジウム 七世紀研究会 大和, pp.27-42
- 内山敏行 2012「装飾付武器・馬具の受容と展開」『馬越長火塚古墳群』豊橋市教育委員会 豊橋, pp.313-324
- 内山敏行 2019「大刀・甲冑・馬具からみた関東と東海東部の首長墓」鈴木一有・田村隆太郎編『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学別冊30 雄山閣 東京, pp.65-78
- 内山敏行 2021「古墳時代下毛野の凝灰岩利用」『歴史だより』第121号 栃木県歴史文化研究会 宇都宮, p.2
- 内山敏行 2022「栃木県下野市御鷲山古墳の小札甲－2列円頭形と1列偏円頭形の組み合わせ－」『研究紀要』第30号 公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 下野, pp.89-101
- 宇都宮市教育委員会 2014『竹下浅間山古墳とその時代』とびやま歴史体験館第18回企画展 宇都宮市教育委員会
- 木下亘 1989「大和における6世紀の須恵器概観」『斑鳩 藤ノ木古墳 概報』奈良県立橿原考古学研究所 橿原, pp.77-80
- 今平利幸 2023「第II章 大谷石と人との出会い」『大谷石文化への誘い』宇都宮市大谷石文化推進協議会, pp.21-40
- 齊藤大輔 2023「古墳時代後期における鉄鉾の変遷」『後期古墳研究の現状と課題Ⅰ－交差編年の手がかり－発表要旨集・後期古墳資料集成』中国四国前方後円墳研究会第26回研究集会（高知大会）実行委員会 高知, pp.159-172
- 酒井清治 2009「菅ノ沢窯跡群の操業順序と年代について」酒井清治・藤野一之・三原翔吾編『群馬・金山丘陵窯跡群』II－菅ノ沢遺跡（須恵器窯跡群・古墳群）・巖穴山古墳の発掘調査報告－ 駒澤大学考古学研究室 東京, pp.232-242
- 坂本豊治・上山晶子・景山このみ・田村朋美・花谷浩 2018「上塩治築山古墳の再検討」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第6集 出雲弥生の森博物館 出雲, pp.1-176
- 佐藤隆 2003「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年－陶器窯跡編年の再構築に向けて－」『大阪歴史博物館研究紀要』第2号 大阪, pp.3-30
- 佐藤渉 2019「しもつけの大型古墳と須恵器甕－古墳時代終末期の墳丘儀礼－」『栃木県考古学会誌』第40集 栃木県考古学会 宇都宮, pp.79-95
- 佐藤渉 2022「第2節 車塚古墳の諸問題（1）壬生車塚古墳出土須恵器について」『栃木県壬生町 車塚古墳』II 壬生町埋蔵文化財調査報告書第34集 壬生町教育委員会（栃木県下都賀郡）, pp.118-129
- 島根県教育委員会（山本清執筆）1964『妙蓮寺山古墳調査報告』
- 白石耕治 2007「陶器編年と藤ノ木古墳の須恵器」『財団法人 大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2005年度 共同研究成果報告書』財団法人 大阪府文化財センター 大阪, pp.197-212
- 白石太一郎 1996「第4章 考古学的考察 1 土器よりみた古墳の年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第65集 東国における古墳の終末 附編 千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告 佐倉, pp.143-147（白石太一郎2000『古墳と古墳群の研究』塙書房 東京 第11節pp.397-431の一部として再録）
- 瀬川貴文 2008「第3章 特論 第6節 古墳時代の重要資料」『新修名古屋市史』資料編 考古1 名古屋市発行, pp.906-914
- 田代隆・小森哲也 1984「横塚古墳」『石橋町史』第一巻 史料編（上） 石橋町（栃木県下都賀郡）, pp.56-108
- 田辺昭三 1966『陶器古窯址群』I 研究論集第10号 平安学園考古学クラブ 京都
- 常川秀夫 1976『竹下浅間山古墳』宇都宮市教育委員会埋蔵文化財報告書第2集 宇都宮市教育委員会
- 津野仁・山口耕一・内山敏行・池田敏宏 2004「三嶋山麓窯跡群の須恵器生産（II）－前半期の様相を中心として－」『栃木県考古学会誌』第25集 栃木県考古学会 宇都宮, pp.141-160



栃木県教育委員会（常川秀夫）1974「下石橋愛宕塚」『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』栃木県埋蔵文化財調査報告第12集, pp.119-199

とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター（進藤敏雄）2004『塚原古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第280集, 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団 宇都宮

とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター（篠原祐一）2017『板戸愛宕塚古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第387集 栃木県教育委員会・（公財）とちぎ未来づくり財団 宇都宮

豊島直博 2019「頭椎大刀の生産と流通」『考古学雑誌』第102巻第1号 日本考古学会 東京, pp.77-121

中山真理 2018「下石橋愛宕塚古墳出土の須恵器大甕について（一）」『栃木県立博物館研究紀要－人文－』第35号 宇都宮, pp.7-12

中山真理 2020「資料紹介 下石橋愛宕塚古墳出土の須恵器大甕について（二）」『栃木県立博物館研究紀要－人文－』第37号 宇都宮, pp.1-8

奈良県立橿原考古学研究所（河上邦彦）編 1977『平群・三里古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第33冊 奈良県教育委員会

奈良県立橿原考古学研究所（河上邦彦）編 1987『史跡牧野古墳』広陵町教育委員会（奈良県北葛城郡）

新納泉 2009「前方後円墳廃絶期の暦年代」『考古学研究』第56巻第3号（通巻223号）岡山, pp.71-91

土生田純之 1988「古墳出土の土器」『季刊考古学』第24号 特集 土器から読む古墳社会 雄山閣 東京, pp.45-48（土生田純之 1998「第一部 土器と葬送儀礼 第1章 古墳と土器」『黄泉国の成立』学生社 東京, pp.32-39に再録）

日高慎 2022「第2節 車塚古墳の諸問題（2）壬生車塚古墳の埴輪をめぐって」『栃木県壬生町 車塚古墳』II 壬生町埋蔵文化財調査報告書第34集 壬生町教育委員会（栃木県下都賀郡）, pp.130-134

藤野一之 2019「第2章 関東地方における須恵器生産の展開 第2節 北関東型須恵器の成立と展開」『古墳時代の須恵器と地域社会』六一書房 東京, pp.58-79

増田一裕 1995「飛鳥時代須恵器の編年にかかる追試作業」『土曜考古』第19号 土曜考古学研究会 桶川, pp.51-82

三毳窯跡研究会 2009「三毳山麓窯跡群の須恵器生産（III）－岩舟町和田窯跡出土須恵器の再検討（報告篇）－」『栃木県考古学会誌』第30集 栃木県考古学会 宇都宮, pp.147-169

三毳窯跡研究会 2011「三毳山麓窯跡群の須恵器生産（III）－岩舟町和田窯跡出土須恵器の再検討（考察篇）－」『栃木県考古学会誌』第32集 栃木県考古学会 宇都宮, pp.37-67

水野敏典 2003「鉄鍬にみる古墳時代後期の諸段階」『後期古墳の諸段階』東北・関東前方後円墳研究会 佐倉, pp.29-41

南河内町史編さん委員会（山ノ井清人・水沼良浩）1992「御鷲山古墳」『南河内町史』史料編1 考古 南河内町発行（栃木県河内郡）, pp.461-493, カラー口絵18-20

宮代栄一 1993b「中央部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会, pp.253-290

三輪嘉六 1990「海北塚古墳」日本馬具大鑑編集委員会編『日本馬具大鑑』第一巻 古代上 日本中央競馬会 東京, pp.98-99, 図版pp.115, 161

桃崎祐輔 2001「棘葉形杏葉・鏡板の変遷とその意義」『筑波大学先史学・考古学研究』第12号 つくば, pp.1-36

桃崎祐輔 2023『古代騎馬文化受容過程の研究 日本編』同成社 東京, 第III章第3節pp.292, 294

梁木誠 1987「南高岡窯跡群採集の須恵器」『真岡市史案内』第6号 真岡市教育委員会市史編さん室 真岡, pp.122-137

## 参考文献〔韓国文〕 カナダラ順

慶尚大學校博物館（趙榮濟・柳昌煥）2004『宜寧 景山里古墳群』慶尚大學校博物館研究叢書第28輯 晉州, pp.39-44, 203-205

國立光州博物館（운 화수・박경도・장제근・김태영・노형신・최유지・임숙）2021『咸平 禮德里 新徳古墳』國立光州博物館學術叢書第70冊 光州, pp.333-334

李炫姪（이현정）2009『嶺南地方 三國時代 三繫裝飾具 研究』慶北大學校 文學碩士學位論文 大邱, pp.108-110

諫早直人 2021「咸平 新徳1號墳出土馬具の系譜と製作地」『咸平 禮德里 新徳古墳－논고（論考）－』國立光州博物館學術叢書第70冊 國立光州博物館 光州, pp.102-121